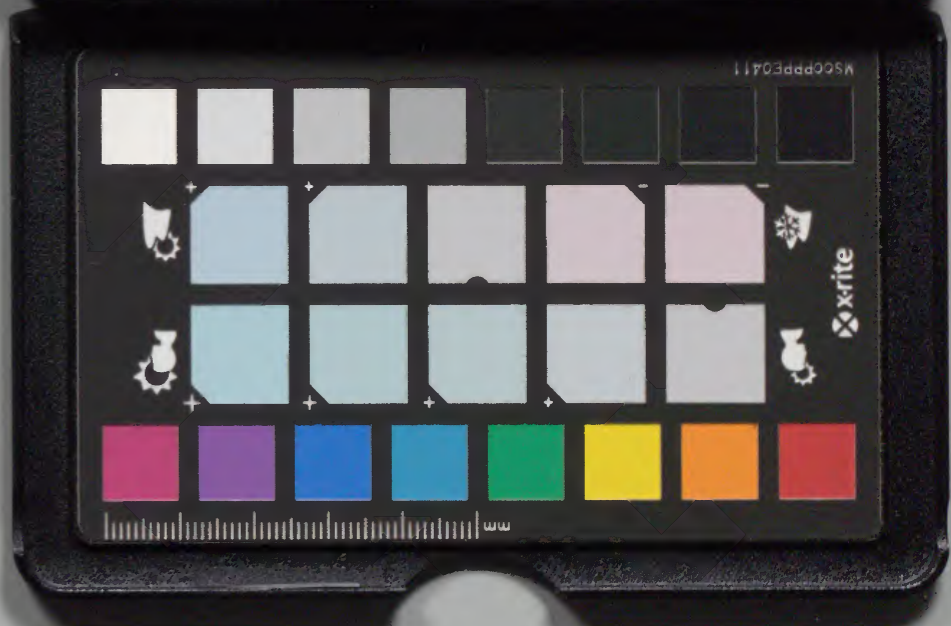
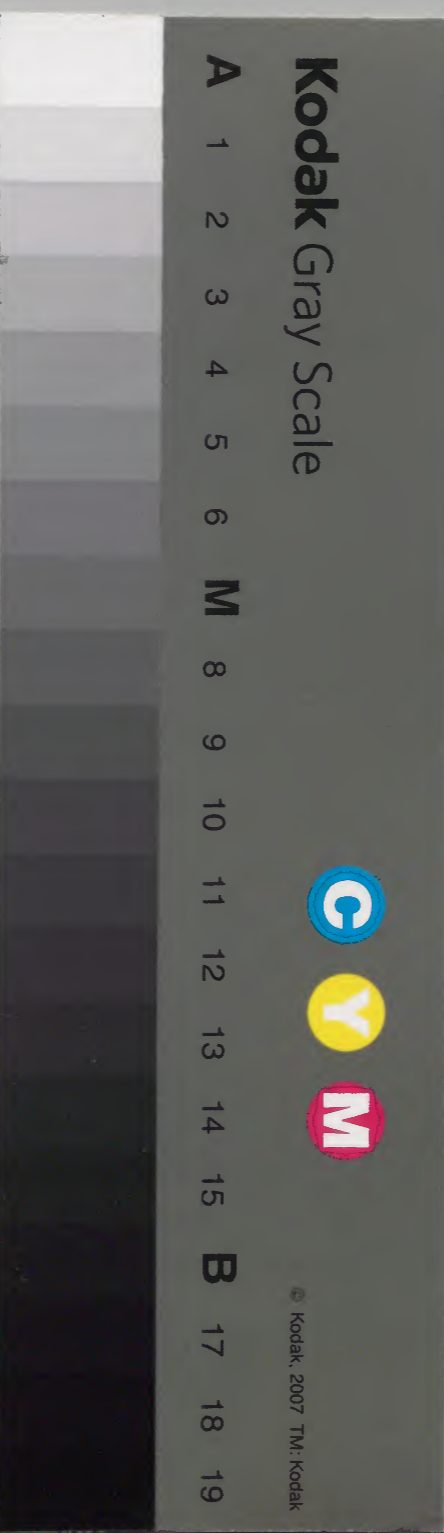


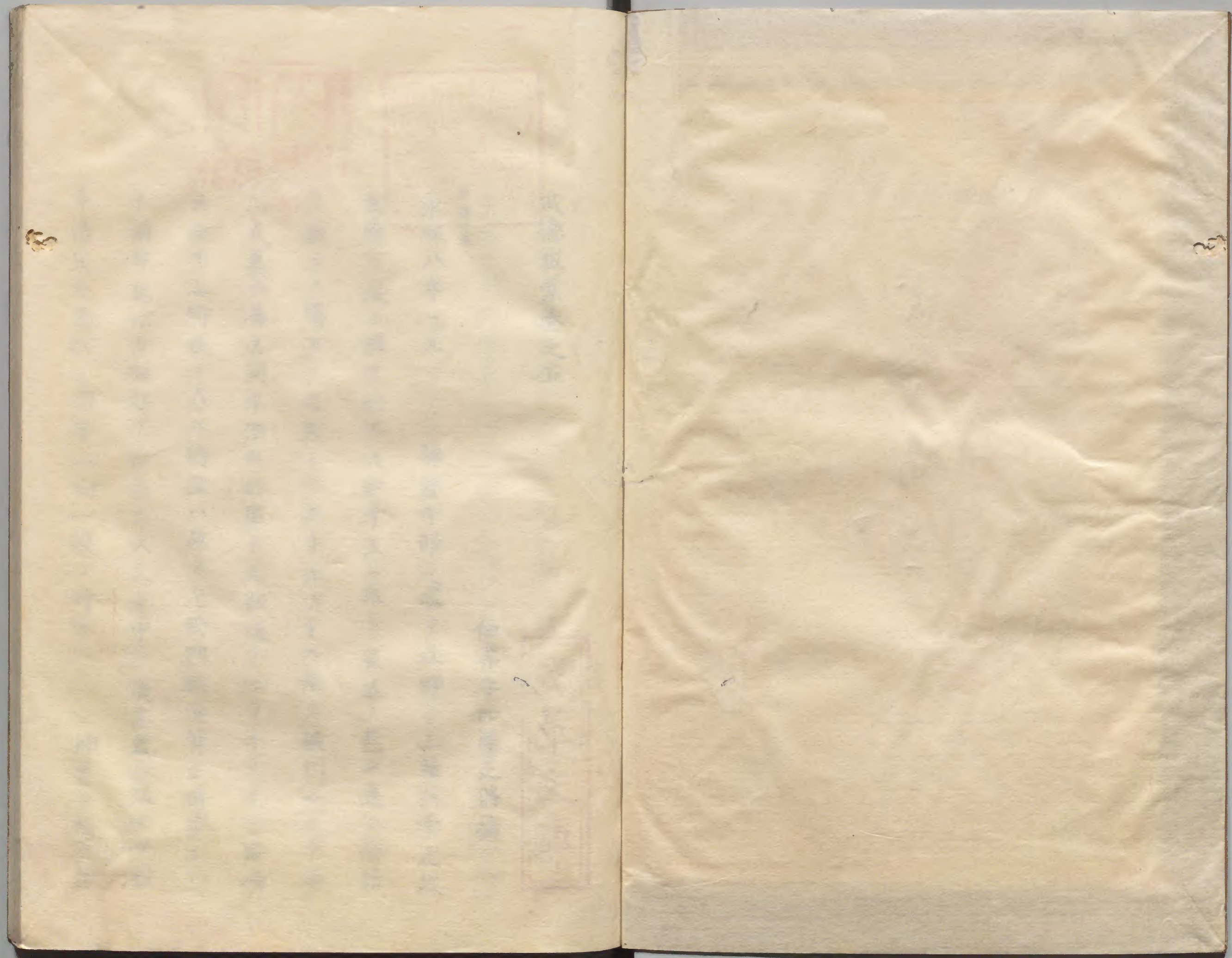
武德成業

五

内閣文庫			
五	五	五	和
〇	二	二	書
函	一	一	
四	三	一	
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 15251
冊數	63 (5)
函號	150 12





武徳成業卷之五



武徳大成

永祿八年乙丑

伯耆守加藤正脩編

淺草文庫

先陣ニ進ム城主鈴木大和守大ニ敗テ家並ノ邑ニ遁シ隠防

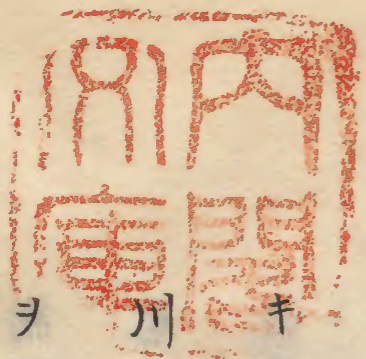
キ戦フノ備ヲナス然レモ其手立ナキニ依テ駿州ニ入テ今

川氏真ニ属ス同年酒井將監モ又叛逆ノ心ヲイタイテ岡崎

ヲ去テ上野城ニ入ル將監ハ故ノ左衛門尉淨賢カ嫡男ニシ

テ酒井忠次カ嫡姪ナリ去ル天文年中廣忠君ニ叛ヒテ松

平清定ニ帰伏シ頃年一向一揆ノ時亦神君ヲ叛ク然



レトモ罪ヲ赦シテ是ヲ咎メ玉ハス將監弥奢テ奸惡ノ志ヲ
抑シ今年モ又謀叛ノ企ヲナス 神君大ニ怒テ酒井九
衛門尉忠次本多豊後守廣孝ニ命メ上野城ヲ攻シム時ニ内
藤三九衛門尉信成十七歳急ニ進ンテ城門ニ至リ坂部造酒
之亟カ首ヲ切本多九藏重玄天野作右衛門モ急ニ敵兵ヲ撃
テ討倒ス今村茂兵衛勝長矢ヲ放テ奮ヒ戦テ將監カ兵士皆
思ラク暴惡ノ乱臣ニ帰服センヨリハ不若寛仁大度ノ
神君ニ仕ヘ奉リテ永ク忠義ノ譽レヲ傳ヘシニハト言テ悉
ク皆降参ス將監カ屈シテ城ヲ出テ駿州ニ出奔ス

續開談

右勝長共討城陣より矢玉懸く法軍變効ははれ勝長共
らに在立櫓へ矢射を射込し負出れし依り將監を従軍
極く味方小隊り將監城を明退す甲州小隊長を矢を
射るは為持込ししを依り稱英す

古人物語

酒井九衛門尉兄將監 酒井ノ
惣領也 三河上野ト云所居城也逆心ニ依
テ 御家ヲ立退キ甲州へ退キ被果候此時松平甚三郎
ト云御譜代衆將監聳ニテ將監ト一所ニ甲州へ参リ候テ信
玄へ奉公也サテ將監モ甚三郎モ果候テ以後九衛門尉未小
五郎ト云時 權現様ト旗ヲ合セテ甲州へ討策ニ弓矢

ノ格御聞可被成タメニ被遣候信玄悦テ
家康ノ側不
可離者ナルニ能々ノ迷懐ノアレハコソトテ女房持候哉ト
尋也未夕持不申候幸也トテ似合ノ娘御尋則山縣三郎兵衛
娘似合ニテ縁ヲ組一男子ヲ持三歳ノ時ニ左衛門尉甲州ヲ
出歸參也信玄御申殘多キ也位山縣力孫也トテ育被申候
甲州崩ニ
御家へ被召出候テ松平甚三郎跡式無之ト
テ三左衛門知行ノ内五千石被下松平甚三郎跡ニ被成テ今
其筋酒井宮内所ニ居被申候今ノ酒井因幡守兄也甚三郎ト
云也

武徳大成

同年今川氏真遠州濱松ノ城主飯尾豊前守

神君ニ内

通スト聞テ大ニ怒リ密ニ駿州へ招テ豊前守ヲ殺ス豊前守

カ家臣江馬安藝守同加賀守濱松ノ城ヲ守リテ堅ク志ヲ

神君ニ通ス
神君是ヲ感メ書ヲ賜テ飯尾カ奮領ヲ安

堵セシム

同年ノ春東三河ノ諸士今川カ器量不足ニメ倚リ頼ムニ足

サルヲ知リ大半
神君ニ帰伏ス設樂氏一番ニ妻子

ヲ携ヘテ岡崎ニ来ル西郷孫九郎野田ノ菅沼新八郎定盈下

條ノ白井氏長篠作手段峯ノ諸士跡ヲ追テ悉降伏ス是ニ依

テ三河全御麾下ニ属ス

神君本多作左衛門高力左近

天野三郎兵衛ニ命メ三河ノ三奉行トシ制法ヲ定メ訟ヲ聞
シム本多ハ生レ付強毅ニメ怒リ多シ時ノ人鬼作左ト称ス
高力ハ天性慈悲深クメ時世ニ阿リ從ツテ決斷スルヲ好
マズ時ノ人其一訣セサルヲ謗ル

明良洪範

本多重次

作左衛門

三河ニテ三奉行勤ル時三州ニテ條々書掟

ラレシニ百姓トモ一向ニ不用如何セント評議品々ノ所ニ
重次ハ下ノ情ニ通シ能事ヲ弁タル故重次申ケルハ土民ハ
イロハチダニ知ヌ処ニ堅キ文字ニテ古秘タル文言ヲ以高

札立ラレタル故一圓ヨメ子ハ何ト云フヲ不知教様アルヘ
シ我等ニ任セ玉ヘイカニモメニイロハニテ何々ノト
書テ右ヲ背ク者ヲハ作左カ叱ルト書加ヘシヨリ國中堅ク
法令ヲ守レリト也

武徳大成

五月十五日應仁文明以來禍乱究リ刺ヘ足利將軍家西流ト
成テ益綱紀廢シ威望衰ヘ兵權管領細川ニ歸シ是モ亦尪弱
ニシテ其老臣三好家僭奪ノ餘リ遂ニ細川晴元以來僅ニ管
領ノ名ノミアリテ實ナシ三好モ長慶没後其嗣左京大夫義
繼弱年タルユヘ其一族三人並彼執事松永彈正少弼久秀等

逆謀ヲ企テ今日當柳營亞相義輝卿ヲ弑ス院 證光源殿 連枝一乘

院門主覺慶江而矢嶋ニ落魄セラル密々義兵ノ調畧ヨリト

云云

老人雜話

ニ好ト人姑言傳ハニ好修記多なり元細川持信ハニ好

と滅一一家警思す修理又光源院殿乱ハニ好

病死す世付リ一人死トおトくトくト一人姑信ハニ好

日向トりハニ好もトきト人ハニ好なりハニ好永深八ハニ好年ハニ好小我輝ハニ好と殺ハニ好

世ハニ好人ハニ好死ハニ好なりハニ好修理ハニ好と首ハニ好は人ハニ好よハニ好ひハニ好近ハニ好依ハニ好とハニ好きハニ好

感狀記

源君於參河每歳夏中ハ麥飯タリ近侍ノ中漕ニ白米ノ飯ヲ

椀ノ底ニ入レ上ニ麥飯少シ許ヲ蓋テ出シレハ源

君御覽アリテ汝等我心ヲ不曉以予吝ナルト思ヘルカ今戰

國ノ時ニテ兵役動又年ナシ士卒煩擾ニメ寢食ヲ安ンセス

予獨何ソ飽足ルニ忍ンヤ且我一身ノ奉養ヲ儉約ニシテ以

テ軍用ニ給セントス百姓ヲ勞メ自ラ豊ナルトヲセシト仰

ラレケレハ聞者皆悦服セリ

家忠日記

十一月廿七日此日三河國人鈴木八右衛門ニ故有テ證文ヲ

賜ル

瀬戸地之内

一三石五斗五升

称豆方

此内一石八寄進

一二石八斗七升

四郎右衛門分

一三石五斗八升

以上拾石也此内外此代十貫文

右之分依有子細酒井雅樂頭為奏者所令扶助者也永不
可有相違之狀如件

永祿八年乙丑十一月七日

藏人

家康

鈴木八右衛門殿

永祿九年丙寅二月十日

大神君兩江馬二疋ヲ賜テ旧

冬ノ忠功ヲ感之采地ヲ安堵セサセ是ヲ勵玉フ

武徳大成

永祿九年丙寅五月三州牛久保ノ城主牧野成定卒ス其子右

馬允康成家督ヲ繼テ同族出羽守卜地ヲ争テ訴論ニ及フ

神君是ヲ聞テ書ヲ康成ニタマハツテ悉ク旧領ヲ授ケ玉フ

家忠日記

一 從所々雜説虽申成有糾明可申付度

一 其身於有煩切々無出仕不沙汰有間鋪候事

一 判形之地之内從何方虽有申様許容有間鋪候事

附諸給人之儀五六人衆之可為相計度

右之條々不可有相違者也仍如件

永祿九丙寅五月九日

藏人

家康

武徳大成

牧野右馬允殿

且水野下野守信元二命メ出羽守ヲ追放ス下野守書曰牧野

力家臣ニ授テ右馬允ニ負サルヲ懇ニ告ク

家忠日記

今度右馬允殿就死去跡職異儀有間敷一札 家康被

出候任其判形拙夫モ達而承候間如此候若此上世上被申

懸候共岡崎任一札共旨可申候此等之趣各江茂可被仰候

右馬允殿御息馳走可申候一兩年駿河ニ雖被留置候諸役

等之儀異儀有間鋪候假令岡崎ヨリ兎角之儀若被申候共

一札之上者掛身上可申間不可有疎畧候就夫出羽守殿父

子從何方飯宅有度之由訴訟候共 家康江達而可申

候是亦可被任置候為其如件

永祿九 丙寅年

十一月四日

水野下野守信元

牧野山城守殿

能勢丹波守殿

喜竹齋

牧野越中守殿

稻垣平右衛門殿

山本帶刀左衛門殿

同 美濃守殿

武徳大成

同年十二月

神君從五位下ニ叙シ三河守ニ任ス

同年

神君戸田三郎右衛門忠次ニ与力二十二人ヲ附

シテ悉ク采地ヲ賜ヒ且其同族兵右衛門尉同九右衛門尉同
与五右衛門尉ニ食禄ヲ給テ其軍功ヲ賞ス

家忠日記

永禄十年丁卯鈴木日向守及ヒ男監物家並ノ采地ニ入テ暫

ク是ニ居ルト云トモ堅ク守ル丁ヲ得ス遂ニ駿州ニ走ル

武徳大成

永禄十年丁卯五月織田信長

神君ト嫁娶ノ丁ヲ議シ

其家臣佐久間信盛ヲメ其女ヲ迎テ岡崎ニ到ラシメ 三郎

君信康ニ嫁セシム 三郎君及ヒ信長ノ女モ共ニ九歳ナリ

武田信玄今川氏真元ヨリ舅壻ノ親ミアリテ危急ノ丁有毎

ニ互ニ相救ヲナス頃年氏真器量スクナク且酒色ニ迷ヒ旧

功ノ臣ヲ退ケ新参ノ士ヲ举用ヒ寵臣三浦右衛門依國ノ政

ヲ執テ倭斬日々ニ甚シ是ニ依テ舊臣多ク離散ス 神

君モ亦故アリテ交ヲ断玉フ今年七月信玄使ヲ氏真ニ遣シ

テ曰東三河ノ士多ク岡崎ニ飯服ス 神君ノ威勢日々

ニ盛ナリ願クハ東三河ヲ予ニ賜ルヘシ然ラハ 神君

ト勝負ヲ決シ悉ク東三河ノ地ヲ平ケン氏真悦ス信玄ト交
ヲ断信玄山縣景仲ヲ岡崎ヘ遣シ 神君ニ達シ告テ曰

遠列ノ地大井川ヨリ西ヲ限テ岡崎ニ從ハメ大井川ヨリ東
ヲ限テ駿河ニ及フマテ我領分ニ屬セシメ今川カ領地ヲ分
テ取ラン是ヲ許容シ玉ハ、ホク好ミヲ通セン 神君

許容シ給フ

家忠日記

頃牟氏真遊興ヲ好テ武業ヲ忘レ奢侈積惡身ニ余ル是亡國
ノ端也ト諸人眉ヲ顰ム氏真カ寵臣三浦右衛門依ト云者ア
リ其寵ニ誇テ遊宴ヲ好ンテ是ヲ氏真ニ勸ム夫三浦右衛門

依ハ小原肥前カ子也美男タルニ依テ氏真是ヲ愛メ今川家
ノ臣三浦次郎右衛門尉カ養子トメ其遺跡ヲ續シム小原肥
前守ハ江州ノ人也天文七年今川義元豆州熱海ニ入湯ス江
州ノ住人小倉三河守ト云者此時熱海ニ入湯ス義元三河守
ヲ招テ幾内ノ軍吏ヲ語ラシメ是ヲ聞テ義元三河守カ武功
ヲ感シ駿州ニ彼ヲ留テ臣タラント乞三河守固辭メ曰我已
ニ老衰ス仕ヘテ其功成シ難シ愚子与助ヲメ駿州ニ往テ義
元ニ屬セシメント約シ三河守江州ニ歸テ後翌年春其子
小倉与助遂ニ駿州ニ来テ義元ニ仕ル同十一年秋八月三州

小豆坂ノ合戦ニ小倉与助尾州ノ家士鎗三位ヲ組討ニノ首
級ヲ得タリ義元是ヲ褒メ感状ヲ与助ニ與其後小倉ヲ軍功
度々ニ及ヲ間義元弥彼ヲ美称ス是ニ依テ小倉ヲ其器ヲ
撰ハレメ江州ノ浪人青木筑後守同加賀右衛門尉及ヒ小原
肥前守兄弟坂井以下其余濃州和州ノ中武名アルノ士ヲ數
輩駿州ニ招ヒテ義元是ヲ扶持ス小倉与助卒メ後其子小倉
内藏助小原肥前守カ男三浦右衛門佐等氏真ニ仕ル三浦右
衛門佐ハ小番衆ノ隊長トナリ小倉内藏助ハ十八人衆ノ頭
トナル両輩共ニ末年若シトイヘ氏武名アルニ依テ氏真是

ヲ許ス小倉内藏助ハ十八歳ニテ永禄三年越州景虎相州小
田原ノ城ヲ畧セシト窺フノ時分今川援兵トメ小倉内藏助
ヲ相州ニ赴カシム小倉小田原ノ城ヲ防キ又武州川越ノ城
ニ住テ是ヲ守ル干時景虎兵ヲ松山ヨリ發メ川越ノ城ヲ圍
ンテ攻撃小倉是ヲ拒キ勇ヲ奮ヒ戦功ヲ竭ス北條氏康其勇
敢ヲ美シテ感状ヲ小倉ニ授ク小倉駿形ニ飯テ後今川其武
功ヲ褒メ十八人衆ノ頭トス三浦右衛門尉ハ遠州引間ノ城
主飯尾豊前守逆意ノ時又小原肥前守病痾タルニ依テ三浦
右衛門尉其軍勢ヲ率メ引間ノ城ヲ攻テ戦功ヲ尽ス氏真是

テ彼ヲ愛スルニ依テ其武功ヲ称美メ遂ニ小番衆ノ隊長ト
ス父小原肥前守ハ永禄七年迄三州ノ郡代トメ吉岡ノ城ニ
在テ父子共ニ其武威ニ奢ル

今川家ノ臣三浦朝比奈葛山齋藤田比福嵩ホヲ始メ二十余
人先年尾州桶狭間ニメ義元命ヲ殞スノ時大ヒニ敗シ駿州
ニ北カヘル各是ヲ耻テ閑居ス是ニ依テ小原父子及ヒ小倉
等自然ト權ヲ執ル故ニ今川家ノ旧臣等是ヲ嫉テ恨ヲ含ム
者多シ氏真カ外祖父武田信虎此時ヲ伺ヒ野心ヲ企今川カ
旧臣等ト議メ氏真ヲ亡シ駿州ヲ奪取ント謀ル是更露頭ス

ルノ間氏真大ニ怒テ庵原安房守ニ下知メ信虎ヲ追放ス信
虎駿州ヲ出奔メ京都ニ免ル干時信虎使ヲ甲州ニ遣シ其子
信玄ニ告テ曰今川ノ老臣等氏真ヲ叛ヒテ我ニ組スルノ間
駿州ヲ畧セント欲スルノ处隱謀露頭シテ其事成スメ遂ニ
駿州ヲ去ル汝竊ニ謀テ駿州ヲ奪フヘキノ旨説シム是ニ依
テ信玄今川カ老臣等ヲ謀ル各是ニ從フ信玄悦テ駿州ヲ侵
シ奪ハント窺フ

武徳大成

或説曰信玄

神君ノ威勢日々ニ盛ンニメ今川ノ旧臣

離散スルヲ聞テ年ヲ歴ハ

神君必ス遠州駿河ヲ並

領セン然ラハ吾隣國ノ大敵ヲ得シ急ニ氏真ヲ救フテ
神君ヲ討シトシ跡部氏ヲ駿河へ遣シテ氏真ヲ救ハシトテ
告ク氏真喜スメ曰信玄我ヲ救ハントメ實ハ駿河遠列ヲ掠
メ取シトスルノ謀ナリ我豈邪術ニ欺レシヤ跡部氏帰テ信
玄ニ告ク信玄笑テ曰彼必ス國ヲ失ハン莫遠カラシ他ノ人
ヲメ取シメンヨリハ我是ヲ奪テ威風ヲ大ニセシ即チ氏真
ト義絶メ心ヲ
神君ニ通ス

武邊咄聞書

氏真より

家康公と退治せんとして伯父信玄とたのみる

信玄則約束しぬるに深少は信玄と決て河津境より至く

出く信長は後法り喰ぬまう人信宗よりくくまへを糧に信
考し一重く糧を續處する間易は魚をゆゆしく約束有
信玄奥意小は氏真と欺き進も然斗畧調回安と知く人
中少おろし思ひ
家康公一ノ際洋心と文少て右共内
族をばしふ小初しせむしれ少も此會をばし同安公若氏真馬
と出さ小部百氏真と可滅しし中越是と信宗ありし信玄と
むしたるゆとしめやと作あり後と亦如依やもあつてまを
ゆくまし記後もて有しゆ言也

感狀記

信玄氣ヲ見ルノ法ヲ学ニテコレニ通ス然レモ嘗テコレニ

拘孿之給ハス一日信濃ノ師トタ、カフ時悪氣アリ信玄少
シモ憂ナク備ヲ固シ列ヲ整テ是ヲ待敵ノ虚ヲウガ、ヒ討
テ勝利ヲ得タリ飯テ馬場美濃ヲ召テ氣ヲ見ルノ法ハ信ス
ヘカラス今日カクト語ラレケルニ美濃其悪氣ハ敵ノ為カ
味方ノ為カ辨カタカルヘク候ト申ス信玄師傳ノ趣ハ身方
ノ為也美濃身方ノ為ノ悪氣ト思召ニ由テ合戦常ヨリモ戒
慎ヲ加ヘ玉フ是ヲ以テ危カラスメ全勝ヲ得サセラレタル
ニ候軍旅ハ唯シマリアルヲ第一トスト兼テ御意ナサレシ
ハ此ニテ候トソ申ケル信玄又信濃ニ幾向ノ時鳩一ツ庭前
ノ樹上ニ来ル衆見テ口々ニ私語テ悦フ色アリ信玄其故ヲ
問レケレハ鳩此樹ノ上ニ来ルトキ合戦大勝ニアラサル
ナシ御吉例ニ候ト應フ信玄鉄炮ヲ以テ忽其鳩ヲ打落シテ
衆ノ惑ヲ解タマフ鳩モシ来ラサル時ハ衆疑沮スル心アリ
テ戦ヒ危カラレトヲ慮リタマフ也

信玄出陣ノ前ニ必スナラシアリ是孫武カ七計廟筭ノ遺意
ナリ軍ハテ、後諸將ヲ召テ其日ハ勝負ノ理ヲ問タマフ諸
將各其旨ヲ云信玄聞シ召可ナル時ハコレヲ称シ不可ナル
トキハコレヲ戒シム故ニ一陣一陣ニ功者ト成テ弓矢ノ味

フカシ忠義ノ心ヲ第一トシ武勇ノ業コレニツク人々カヲ
勵メ進退左右ノ手ヲツカフカコトシ其時代ノ國主ニ勝レ
タル處アリ

信玄孫子ノ旗四本ヲ作ラレ又其疾如風其徐如林侵掠如火
不動如山ト云語ナリ其第一ノ旗其疾如風ノ四字ヲ添付テ
寔ニ鮮カ也内藤馬場高坂等ニ見セラル、時馬場臣文ノ意
ヲモ不辨君ノ慮リヲモ不知メ申ハ恐多キナカラ風ノ字
ヲ以テ軍旅ノ道ニ比スレハ不審ニ存候風ノ勢始甚烈トイ
ヘ氏ノナ漸弱リ候朝氣ハトク暮ノ氣ハ歸ルト云ニ不相候

ヤ然ラハ危ク覺ヘ候ト申セハ信玄寔ニ然リサレ氏其旗ハ
先鋒ニアリ疾ヲ善トス我旗本ヲ以其風ヲツカント云レケ
レハ馬場君深ク二ノ身勝ヲ悟ラセ玉ヒヌト云此問答味ア
リ他國ノ所不及也

信玄ハ夕、敵ヲ挫キ決戦ニ長スルノミニ非ス鎮國安民ニ
智アリ他國ヲ切取テハ其地ヲ將士ノ知行ニ与ルナシ於
甲信民モアリツキ地モ肥タル所ヲ新地加増ニ与ヘテ新ニ
得タル郡邑ハ青沼助兵衛小堀伊勢二人ヲ郡代トメ賦税ヲ
寛クシ撫安ヲ專ニセラール一ツニハ久シク戰場トナリタル

村里ナレハ耕耘モカ不足メ五穀登ラシ先惠之テ其業ヲ樂
シメンカ為也二ツニハ小身者僅ノ知行ヲノミ頼ムニ墾田
ヲ與テハ妻子ヲ育鞍韉ノ繕モ成カタカラシカ為也三ツニ
ハ人情皆昔ヲ戀始ヲ慕習ナレハ今ノ政ヲ本ノ領主ニ比ヘ
テ利害損益同シカラハ劣レリト思ヒ勝ル一三分ナラハ
同シモノト思ヒ又勝ル一五六分ニメ後ヨレト思ハシカ為
也是故ニヤ他国ニハ一揆ヲ企ル者アリ信玄一代ノ間手ニ
入タル國民ノ二度叛タル一終ニナカリキ主將心ヲ此ニ用
ユヘシ

勇士一言集

武田信玄公内中殿ニ御書清と云ふ者ハ武田勇を一と云ふ
一信別流尻合戦の時ハ一と云ふと云ふ御書清と云ふ者ハ武田勇を一と云ふ
に情く思ひたる不小頼其平六と云者首一丸く居侍る成又
而も清見と云平六と云小五と云一といふ平六との今日と云
おられあり人歎と云りおと云世にいと云念小なる官も後の
元めいとい首よと云武田首出れく難を其首もとい我小
多一とい小軍の平小はと云一初小流つらハ又御書清の
運持と云不也とい平六其家父と見と云いやくと云せず
をいりかとい思ひ安きと云とて首を流しと云り中殿と

無首と九打と一ひ様一かを侍は是は又悦はるる一に
のし付は振をとりて之を別は取又而は清無首と持り首
帳小付作りぬ武時平去無るものと人小作りぬ此ハ法人は侍
中康らつとさ一少首と人ここのは柄小まらる事一をばし
これいなる首とも捨いくさ方刀小う一もやちと云今を
小野原をより念小思ひ平去と付えと神ひらる無
馬場英治山形一帝は清内者修成は坂道にまで又而は清を
武勇は者一丈短小ふをて一我武勇は励もる一き小人は
元沙流の道を志ぬゆへ又平去らふまひハ日ハ大功の者

小も何は比無はより一とて信玄公一やとる北平六ハ山を越
はなり

信玄公は内小名和を理と取と云者をより何の時は合戦り塘
守の石をとり一和小有一歌嶽と按く侍無より守の石を之は
かこり小よりいさを理との何は皆乃申一欠入く徳士を討た
至形は見え小入まんと云はれハを理の物教とあり数百挺を
しるり銃炮の中ハかこらぬとのこしひ侍守の石を打た
さへハ向後を理の物とり小名と改くを理の物小ぬめくしたも
りる守の石をれくを理の物小を打たはと云たり

名和の兵に助小治りてせしむるに神君の功を記す

武徳大成

永禄十一年 戊辰正月十一日

神君左京大夫ニ任じ玉

同年三月今川カ部将尾藤氏竹田氏山村修理堀川ノ城ヲ守

ル 神君兵ヲ遠列へ出じ是ヲ攻玉フ松平勘四郎信一

榊原小平太康政先陣タリ時ニ大久保甚十郎城壁ニ上ル城

中ヨリ鉄炮ヲ放ツ甚十郎是ニ當テ死ス平井甚五郎相續テ

進ミ入ル又鉄炮ニ中テ死ス小林平太夫重直進ンテ城ニ入

ントス利ヲ得スメ戦死ス森川金右衛門氏俊奮ヒ戦テ首級

ヲ得タリ信一康政等屑ヒセス奮ヒ戦テカヲ尽ス堀川城遂

ニ陥ル此役ニ大久保新十郎十六歳進ミ戦テ首級ヲ得タリ

武功實録

酒井将監小扈從榊原小平太ヲ 権現様へ御モライ被

成候時水野下野守殿家人神谷金七常ニ念頃ニ咄候故小平

太へ申候ハ其方事 家康公へモラハレ候了能仕合ニ

テ候小身人ナレハ具足モ被持間鋪キト笑止ニ候間是ヲ餞

ニマイラスルトテ銀具足ノ少々チキレタルヲ一領贈候其

以後小平太件ノ具足著テ高名有夫ヨリ嘉例トメ出陣ノ刻

ハ件ノ具足ヲ真先へ被為持候由

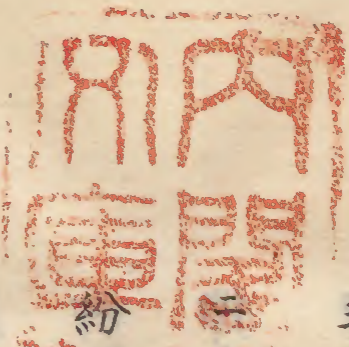
右ノ具足ヲ金七小平太へ遣ス時ニ申ハ其方ハ若フメ器量

有 家康公へ御モライ候上ハ後々如何様ノ人ニカナ
ラルヘキ末頼鋪候我等子孫若浪々ノ身トモ成ナハ今日ノ
我等カ懇意ヲ忘ラレス懇ニ仕玉ヘト申ケルトソ如紫神谷
子孫浪人ト成シヲ小平太扶助メ懇ニ召使ヒ今ニ至テ榊原
家ニ神谷子孫アリ酒井将監内中根氏村上氏伊藤氏ヲモ小
平太ニ
權現様ヨリ御付被成候

明良洪範

家康公遠刈濱松へ御打入被成度思召濱名方先鋒ノ士縣刑
部右衛門方へ御内意度々被仰遣刑部右衛門申上ルハ濱名
越ノ儀本坂引^{イナ}佐ニテ所難所其上今川譜代ノ士濱名兵庫司

リ罷在候へハ右ノ兩所ノ難所凌キ御通アラシ^シ危ク候幸
宇里ヨリ金指へノ道モ順道ニ候間金指へ御出濱松工御打
入被成可然ト達テ申上レヒ 神君御兼引ナク兩所ノ
難所ヲ兵庫支へ居氏少モ不苦ト上意ニテ本坂越ニ御通可
被成ニ窮故刑部重テ申上ルハ左アラハ重テ時節ヲ見合セ
御一尤右可申上由ヲ申上其日ニ至リ御内意申上レハ
神君本坂ノ麓スセノ郷ニ御馬ヲ被立御先手ノ面々ハ甲冑
ヲコモニ包ミ下部ニモタセ又ハ自分ニセヲヒ前後ニ手ニ
分テ宇里通り金指氣賀ニテ落合一手ニ成テ濱松へ御打入



也其節刑部右衛門ハ獵人ノ様ニ成本坂正御迎ニ罷出テ御
 手引申上ル本坂峠御馬越サセ玉フ時刑部召仕フ處ノ者氏
 相圖仕リ濱名ノ郷マカマ寺大福寺西寺へ火ヲ掛サセ共
 紛レニ本坂引依無恙御通り被遊此節刑部右衛門働御感ノ
 由御直ニ上意アリ其後濱松御手ニ入刑部右衛門ヲ被召出
 御褒美被下濱松ノ城二ノ丸ヲ御預ケ置ル三州御譜代ノ内
 福井修理後改清藤此西人相備ニテ御旗元ノ士三十六騎宛ノ組
 頭ニ被仰付本丸ハ本多作左衛門御城代ノ所ニ小田原御陣
 ノ節故アツテ本多領知被召上三千石ノ御扶持方計被下籠

居ス此時縣刑部右衛門モ福井モ領知被召上浪人ノ身トナ
 リ福井ハ遠州一ノ宮ノ領二百五十貫上リ后武州川越ニテ
 三百五十石ヲ被下刑部ハ浪人ノ内ニ病死断絶スル也

武徳同月 神君宇豆山城ヲ攻玉フ時ニ小原肥前守城ヲ守

リ 神君ノ到リ玉フヲ見テ防キ戦ヒ難キヲ知リ硝火
 ヲ城中ニ埋メテ急ニ他方ニ走ル御方ノ先陣城ニ入ル時忽
 チ宿火發ス諸士大ニ驚キ是ヲ避テ害難ニ逢者ナシ其後遠
 州二侯ノ城主二侯左衛門尉及ヒ高藪ノ士淺原氏須田寺ノ
 士松平氏久野城主久野三郎右衛門宗能等共ニ今川ヲ叛テ

神君ニ帰伏ス

家忠日記

九月七日織田信長依々木兼禎ヲ撃ント欲シ師ヲ帥テ岐阜ヲ發ス

十一月信長江州愛知川ニ至テ兵ヲ進メ觀音寺ノ城ヲ攻メト欲ス先箕作ノ城ヲ囲ム森三左衛門尉可成坂井右近柴田修理亮先馳タリ兼禎和田山ニ砦ヲ築テ兵ヲメ是ヲ守ラシム信長江州ノ軍勢ヲメ和田山ヲ押ヘシメ箕作ノ城ニ向ヒ依々間右衛門尉信盛木下藤吉郎秀吉丹羽五郎左衛門尉長秀淺井新八郎等ヲメ是ヲ攻シム城兵能拒テ城陷ラス是ヨ

リ前信長援兵ヲ大大神君ニ請フ大神君是ヲ諾

シ玉ヲ松平勘四郎信一

後号伊豆守

ヲ援助ノ首將トメ兵一千余騎

ヲメ江州ニ赴シメ玉ヲ

十二日信長依々間信盛ヲメ松平勘四郎信一カ遠来ヲ勞テ箕作ノ城ヲ攻ル先隊トス信一諸將ニ先達テ箕作ノ城ヲ攻テ外郭ヲ破ル信長ノ兵同ク進テ攻入二ノ丸ヲ破ルトイヘ氏寄手ノ軍勢命ヲ落シ疵ヲ蒙ル者數百人ニメ進マス木下藤吉郎秀吉夜ニ入本城ニ攻入ル勘四郎信一先登ス于時信一大ニ呼テ云三州ノ援兵松平勘四郎先登ト云々諸卒偏ク

其声ヲ聞ク城將建部源八郎拒ク_レヲ得ス竊ニ城ヲ出テ免
レ去ル是ニ依テ箕作ノ城陷ル

十三日信長信一ヲ招テ昨日箕作ノ城ノ先登其勇敢ヲ美称
シ大ニ感メ云ク汝カ肝ニ毛生タリト謂ツヘシ信長著スル

所ノ草胴服相之ヲ以テ信一二授ク是ヨリ信一相ノ紋ヲ以テス信一カ
家ノ紋元葵タリトイヘ御當家ニ

憚リアルニ依テ改テ酸醬
草及ヒ相ヲ以テ紋トス

依々木兼禎箕作ノ城陷ルヲ聞テカヲ失ヒ觀音寺ノ城ヲ弃
テ甲賀郡ニ赴ク和田山ノ城モ又没落ス信長兵ヲ進メテ十
八ノ城ヲ拔テ江州漸ク平ク于時信長不破河内守ヲ遣ヒ義

昭靈陽院ヲ迎フ義昭悅テ江州守山ニ至ル信長謁見ヒ義昭ヲ

引テ洛ニ入ル

廿八日義昭洛ニ入テ清水寺ニ寄宿シ信長ハ東福寺ニ在リ

信長管屋九郎九衛門尉ヲ以京師軍勢ノ狼籍ヲ制禁ス于時

松平勘四郎信一カ下人ト織田上野介信包カ從卒京師ニ入

テ乱妨取ニ古キ烏帽子ヲ爭ヒ奪テ口論ス其事止ス既ニ鬪

爭ニ及ハントス美濃尾張兩國ノ多勢一同ニ起テ信一カ寄

宿ヲ困ム信一カ從士等弓鉄炮ヲ以テ是ヲ拒ント欲ス信一

押留テ狼籍ノ所謂ヲ問洛中騒動メ静ナラス信長聞テ大ニ

怒テ則使ヲ登メ尾濃兩國ノ軍勢ノ中狼藉人ヲ禁メ慙懃ノ
使者ヲ以信一ニ云テ曰尾濃ノ下卒ラ卒介ノ狼藉信長全ク
是ヲ知サルノ旨ヲ陳謝ス重テ信長使ヲ以テ持筒ノ鉄炮一
挺ヲ信一ニ与ル信一暇ヲ信長ニ告テ三列ニ帰ル

感狀記

稻葉一鐵信長ニ隨從ストイヘ氏其心腹ニアラスメ後患ア
ラントヲ疑レケレハ一日享之數寄屋ニテ賜茶可殺之トノ
謀ナリ一徹數寄屋ニ入時相伴フ人三士挨拶ニ懸物ノ繪讀
ヲ讀シム一徹少シ文学アリ即其讀ヲ讀ム三士其意奈何ト
問一徹説之信長隔壁テ聞之戸ヲ開テ入テ曰客ハアラ勝負

ヲスル勇士トノ思ヘリ今讀ヲ讀ヲ聞ニ文書ニモ達セリ
我人朝夕鎗ヲ握リ馬ヲ馳セ隙ナキ時ニ奇特ノ一感スルニ
勝タリ今日ノ享ハ客ヲ賞スルニ非ス其二心ヲ疑テ殺サシ
トスルニアリ相伴ノ三士ニ皆懐劔ヲサ、シム今客カ文書
ノ為ニ赦之是ヨリ永ク我謀臣トナレト云テ三士ノ懐劔ヲ
出サシメテ一徹ニ示ス一徹拜シテ死ヲ宥メラル、條誠ニ
忝シ臣モ内々虽存之セシ方ナキニ因テ隨從ス定メテ數寄
屋ニテ殺サルヘシ一人ハ是非相手ヲトラント存シ所帯也
ト懐中ヨリ短劔ヲ取出メ信長ノ前ニサシヲケハ信長又其

用意ヲソ譽ラレケル

家忠日記

十二月六日今川氏真カ家臣ラ志ヲ武田信玄ニ通ス是ニ依

テ信玄駿州ヲ畧セント欲メ兵ヲ卒メ甲州ヲ發ス

武徳大成

同年十二月武田信玄駿州ヲ攻ントス 神君遠州ニ出

張シ大井川ヲ限リ遠州ヲ領セントシ管沼新八郎定盈今泉

四郎兵衛延傳ヲ郷導トシ井伊谷ニ到ラント欲ス定盈カ曰

井伊谷ハ遠州要害ノ地タリ我同族管沼次郎右衛門忠久及

近藤石見守康用鈴木三郎大夫重路ハ井伊谷ニ居レリ此三

人ヲ召テ食邑ヲ授ケ玉ハ、必来テ麾下ニ属セシ然ラハ一

戦ニ及ハスメ井伊谷從ヒ服スヘシ 神君悦ンテ書ヲ

授テ三人ヲ召テ食邑ヲ授ケンテ約ス三人則命ニ隨テ

神君ニ帰服ス

家忠日記

一 今度就遠州入最前面三人以忠節井ノ谷筋令案内可引

入由感悦之至也其上彼忠節ニ付テ出置知行之吏

一 井之谷跡職新知本知一圓出置候吏

一 二俣左衛門跡職一圓之但是ハ五百貫文之事

一 高園曾子方之事 一 高梨

一 氣賀ノ郷

一 カレマノ郷

一 萬石橋ツメ氏二

一 山田

一 川合

一 カヤハ

一 國領

一 野辺

一 アレサウ

一 カンマノ郷

一 人見ノ郷

並ニ新橋小澤之渡彼各立ノ分何不入無相違為私領出置所也並於此地田原三百貫文可出置者也并ノ谷領之外以此各立之内二千貫文任望地可出置也若甲品如何様之儀被申候共以起請文申立上者進退ニカケ申理無相違可出

置也縱何方江成共何様之忠節ヲ以先判形出置共於此上者有相違間鋪者也委細者菅沼新八郎可申候也仍如件

十二月十二日

家康

菅沼二郎右衛門殿

近藤石見守殿

鈴木三郎太夫殿

武徳大成

神君兵ヲ進メテ見付ニ陣ト井伊谷ヲ拔キ玉フテ定盈カ功ヲ感メ兵ヲ授ケ禄ヲ賜フ

家忠日記

今度忠節ニ付而遠州本地川合ノ郷並高部無相違可出之

此上者縦錢棟別十二座諸役為不入可有知行之將亦為新
知河西ニテ五百貫可出之上永相違有間鋪者也手先弥可
令馳走者也委細者今泉四郎兵衛可申者也仍如件

十二月十三日

家康

菅沼新八郎殿

武徳大成

刑部ノ城ヲ攻テ是ヲ取テ菅沼又九衛門ヲメ守ラシム

家忠日記

十六日今度延傳菅沼定盈

神君ノ釣命ヲ奉テ菅沼ニ

即右衛門尉近藤石見守鈴木三郎大夫三人ニ誓紙ノ書簡ヲ

遣ス

今度井ノ谷調議走廻之故本望至極ニ候吉田郷ノ半分之
納百姓共無相違進之候半分之為相當養父ノ郷五十貫相
添進置者也此上者向後別而無御等閑前々ノ意趣無之互
ニ眞實ニ可申合候今度從岡崎被出知行方之儀少モ偽有
間鋪候拙者ノ證人ニ立候上者虚言有間鋪候也若此旨偽
ニ付而者梵天帝釋四大天王別而富士山愛宕地藏阿弥陀
佛御罰ヲ今生後生深可蒙者也仍如件

永祿十一年

菅沼新八郎

定盈

極月十六日

今泉四郎兵衛

延傳

近藤石見守殿

鈴木三郎大夫殿

武徳大成

同月今川氏真兵ヲ卒テ濱松ノ城ヲ攻ム江馬安藝守同加賀
守防キ戦フアタハス妻女ヲ出メ質トシ誓紙ヲ遣ハシ其
罪ヲ陳謝シ今川家ニ降参ス其後加賀守密ニ
告テ曰今川氏真飯尾豊前守ヲ殺メヨリ後疑ヒノ心止スシ
テ屢濱松ヲ攻ルノ急ナルニ因テ暫ク難ヲ遁シシ為ニ質ヲ
出し今川家ニ降参ス然レモ本意
神君ニ叛カス唯一
朝ノ憂ヒヲ免シタメナリ願クハ寛容シ玉ヒテ疑ヒ給フ

ナカレ
神君許容ス加賀守其旨趣ヲ安藝守ニ告安藝

守驚テ曰ク汝我ト同シク此更ヲ
神君ニ告ス

神君許容ノ後我ヲメ其謀ヲ知ラシム我ヲタハカルニ似

タリ是ヨリ深ク加賀守ヲ恨ミ心ニ思ヘラク我タトヘ他日

罪ナキ更ヲ
神君ニ陳謝ス
神君救フヘカラ

ス然ラハ加賀守ヲ殺シテ今川家ニ飯服シ恨ヲ遂セト則加
賀ヲ招ヒテ是ヲ差殺ス加賀守カ從士小野田彦右衛門是ヲ
見テ鎗ヲ取テ安藝守ヲ殺ス
神君時ニ遠州安間頭陀

寺ニ出陣ス小野田氏使ヲ馳テ事ヲ告ク
神君濱松ニ

入テ小野田カ功ヲ感シ地ヲ賜フテ是ヲ賞美ス
同月 神君伴中務ニ命メ小笠原新九郎康元及ヒ其同
族主膳伊豫守等ヲ召テ曰汝等カ族小笠原與八郎及美作守
高天神ノ城馬伏塚城ニ有テ未飯服セス汝等論メ我麾下ニ
属セシムヘシ康元則高天神ニ赴ク

家忠日記

小笠原与八郎ハ信玄ニ属セント欲メ質ヲ携テ高天神ヲ登
ス途中ニメ康元ニ逢テ康元 大神君ノ鈞命ヲ与八郎
ニ説ク与八郎其事決シ難クメ猶豫ス康元強テ是ヲ諫メ遂
ニ 大神君ノ麾下ニ属セシメ康元途中ヨリ與八郎ヲ

携ヘテ飯ル 大神君康元カ功ヲ悦ヒ至ヒテ三州赤羽

根赤沢芦三ヶ村ヲ康元ニ賜ル

武徳大成

同月武田信玄駿府ニ出張メ急ニ今川氏真ヲ討氏真敗北メ

遠州懸川ノ城ニ入テ朝比奈備中守ニ倚頼ス 神君兵

ヲ卒テ懸川ノ城ヲ攻ム内藤四郎左衛門正成大久保治右衛
門忠依本多三弥左衛門正重進ニ戰テ首級ヲ得夕リ今川カ
從卒戰ヒ敗テ死スル者甚多シ御味方ノ兵士太田甚七郎吉
勝火ヲ城下ニ放テ砦ヲ城邊ニ構ヘテ兵士ヲメ是ヲ守ラシ
メ見付ニ飯ル

此月十二日武田信玄師ヲ卒テ駿州ニ入り進シテ由比ノ近
辺松野ニ陣ス今川氏真清見寺ニ出張シ庵原安房守ヲ先隊
トス而テ薩埵山ニ向ハシム此日午ノ刻軍ノ矢合スヘシト
相議スルノ所ニ氏真カ臣瀨名朝比奈三浦葛山等ヲ始テ兼
テ志ヲ信玄ニ通スルニ依テ其陣ヲ棄テ駿府ノ城ニ飯リ忝
ル庵原ヒトリ薩埵山ニ進ムトイヘ凡其兵微ニメ武田カ多
勢ニ戦ヒカタニ故ニ氏真ト共ニ軍ヲ引テ府ノ城ニ飯ル氏
真家臣ノ野心アルヲ知ス城ニ老臣等ヲ招テ軍ノ謀ヲ議
ス于時朝比奈兵衛大夫其坐ヲ去テ鎧ヲ脱テ昌被焼火ニ背

ヲ煖テ踞ル小倉内藏助固部忠兵衛尉等是ヲ怪シ之疑フ氏
真ニ告テ曰大敵既ニ近キ迫テキ急也此時ニ至テ甚急ルノ
形勢又今朝敵ト戦ハサルノ以前ニ陣ヲ退テ府ノ城ニ飯ル
ト彼若野心ヲ狭ムカト氏真ニ訴フ氏真是ヲ聞テ日根野備
中守小倉内藏助ヲメ朝比奈兵衛大夫ヲ殺サシメント欲ス
日根野小倉氏真ノ旨ヲ受テ先朝比奈カ野心ノ實否ヲ試シ
カ爲ニ両輩太刀ノ柄ヲ握テ彼ヲ討ヘキ形勢夥シク頭ニ近
キ寄ルト云凡朝比奈敢テ心ヲ動サレハ依之日根野小倉
等朝比奈ヲ殺サス飯リ来テ彼カ野心ナキ旨ヲ氏真ニ告ル

氏真聞テ是ヲ許ス既ニメ朝比奈駿府ノ城ヲ免シ出テ逐電
ス然リト云氏朝比奈質ヲ府ノ城ニ殘置ノ間兵衛大夫カ弟
ヲ途中ヨリ竊ニ府ノ城ニ飯ラシメ其質ヲ携ヘ道シサラシ
ト欲ス警衛ノ士是ヲ知テ急ニ追懸遂ニ是ヲ殺ス是ニ依テ
兵衛大夫カ逆意露頭ス武田信玄カ先陣山縣三郎兵衛馬場
美濃守小山田兵衛尉小幡上總介真田源太左衛門尉同兵部
少輔内藤修理亮等江尻ノ驛ヲ經テ進シテ上原ニ陣ス干時
氏真カ家臣等信玄ニ志ヲ通スル者數輩アルノ由頻リニ巷
説アリ故ニ羣疑シハク起テ其ノ成難キニ依テ氏真從者ニ

千余人ヲ率メ遂ニ駿府ノ城ヲ避テ土岐ノ山家ニ退キ後掛
川ノ城ニ入ル信玄兵士ヲメ府ノ城ニ放火ス今川カ臣二十
余人氏真ヲ叛テ各信玄ニ属ス信玄降人ノ質ヲ執テ甲刈ニ
遣ヒ駿列江尻井ノ上ノ近辺ニ要害ヲ築テ軍士ヲ籠置其身
ハ久能山ニ叱メ駿州ヲ平ケシトハカル然リトイヘ氏真
カ臣由比淺原齋藤伊久見ノ山ニ楯コモリ小原肥前守其子
三浦右衛門依ハ花沢ノ城ニ在テ堅ク守リ拒ク三浦右衛門
依ハ氏真カ罷臣也故ニ三浦ハ氏真ト氏ニ掛川ノ城ヲ守リ
軍忠ヲ尽スヘキニ掛川ノ城主朝比奈備中守ト三浦常ニ不

快ナリ是ニ依テ氏真ニ別レテ花澤ノ城ニ入テ是ヲ守ル私
ノ遺恨ヲ以テ忠義ヲ忘ル、ナルヘシ藤枝ノ城ニハ長谷川
次郎右衛門尉ヲ首將トメ彼カ族二十一人其兵三百余騎ヲ
以テ是ヲ守ル

武徳大成

是ヨリ前松平源三郎酒井左衛門尉カ女人質ト成テ駿州ニ
有氏真駿州ヲ出奔スル時三浦與一郎源三郎及ヒ酒井カ女
ヲ携ヘテ信玄ニ属ス信玄大ニ悦ンテ是ヲ甲州ニ隠シ置警
衛嚴重ナリ

家忠日記

武田カ臣秋山伯耆守信友使ヲ遠州久野ノ城ニ遣メ久野三

郎右衛門尉宗能ヲ招テ信玄ニ属セシメト乞フ是ヨリ先
大神君酒井左衛門尉忠次ヲメ久野ノ城ニ赴カシメ玉ヒ宗
能ニ命有テ曰近日掛川表ニ御進登アリ于時軍忠ヲ勵スヘ
キ由御旨ヲ蒙ル宗能命ニ従フエニ宗能秋山カ使ヲ聽ス
秋山是ヲ怒テ兵ヲ平尾村ニ遣メ久野ノ城ヲ攻討シト伺フ
宗能一族従卒ヲ率メ鼻鬮淵ヲ要害トシ進ニテ秋山ト戦ヒ
軍ニ利ヲ得敵ヲ多ク撃捕ルトイヘ味方ノ兵士久野亥六
郎ヲ始テ數十人戦死ス近日
大神君懸川御進登ノ告
ヲ聞テ秋山平尾村ノ陣ヲ退ク是ニ依テ宗能兵ヲ久野ノ城

二収ム

秋山伯耆守信友信州伊奈ヨリ兵ヲ遠州ニ俟ニ殺メ愛宕山
ヲ經テ見付ニ至テ叱ス奥平道紋菅沼伊豆守同姓新九郎田
岸新三郎等軍ヲ見付ニ殺メ秋山ト戦フ奥平菅沼田岸等軍
ニ利ヲ失フ秋山勝ニ乘テ進テ引間ニ至リ遠州ヲ畧セント
欲ス乾ノ城主天野宮内九衛門尉去々年ヨリ信玄ニ属ス是
ニ依テ天野共手合トメ軍ヲ引間ニ殺メ秋山ニ來會ス
神君奥平道紋菅沼伊豆守同新九郎田岸氏ヲメ是ヲ攻シム
見付ニ合戦ス然レモ利ヲラス秋山勝ニ乘メ追テ濱松ニ入

武徳大成

ル乾ノ城主モ秋山ニ属ス秋山弥威ヲ振フ
神君秋山

ヲ攻テ曰吾濱松ニ有テ遠州ヲ平ケ定ントス汝何ソ妨ヲナ
スヤ急ニ兵ヲ引テ去ルヘシ若遲怠ニ及ハ、我自ラ兵ヲ出
メ汝ヲ討シ秋山恐レテ信州伊奈ニ皈ル

先日駿府ノ城没落メ氏真他邦ニ至ル時三州ノ質松平源三
郎及ヒ酒井左衛門尉忠次カ娘ヲ駿府ニ存置是ヲ与ル三浦共
与一郎今川氏真ヲ叛ヒテ武田信玄ニ属ス是ニ依テ三浦共
質ヲ携ヘ甲州ニ往テ是ヲ信玄ニ遣ス信玄大ニ悦テ遠三兩
國ヲ畧セシニハ是ヨキ質ナリト謂テ警衛ノ士ヲメ堅ク是

ヲ守ラシム

年有テ或夜大雷烈風警備ノ士聊怠ル時源三郎其部ヲ伺ヒ密ニ免シ出テ雪中ヲ凌キ峻難ヲ経テ旁ノ遂ニ三列ニ飯ハ深雪ニ痛テ両足ノ指落損ス

久野三郎左衛門尉宗能其子千菊丸ヲ携ヘ

御營中ニ參候ス 大神君ニ謁ス宗能愛子千菊丸ヲ御

營中ニ留テ質トシ暇ヲ告テ久野ニ飯時ニ

忠義ヲ御感有テ本領安堵ノ御書ヲ宗能ニ賜ル

久野一門本知行之事

徳富村 池萬渡方 中村方 上久野 若狭方

下久野 上末村 下末元 別所村 同藤谷方

菅谷 不入計 富賀見 谷川戸綿 岩滑 宮賀

島 松袋井 石賀島 挽井 徳光 忍所名 桑

地 正道 堀越之内 海藏寺領 土氣 乘氣之

内 五十貫文 勝田之内 中村 五十貫 鎌田 下川合之内

帳外 岡部之内 給物 在之 國領 給物 在之

以上都合二千五百貫文

右今度忠節ニ付而本知如駿州ノ時宛行所永不可

有相違若此以前何方へ判形雖出置此上者不可有

別條弥於抽忠節者可令扶助者也仍如件

永祿十一年

十二月廿一日

家康

久野三郎左衛門尉殿一門同心衆

宗能愛子千菊丸ヲ質トメ御當中ニ殘シ置事

其志ヲ感シ玉ヒテ千菊丸ニ別ニ食禄ヲ賜ル

山名庄之内井ノ領

コ七カ半 トクミツ 天王 ヲヤマ 横井 別所

ノフ、サ

七ヶ所此外大屋十八貫文

右之旨領掌ノ上永相違有間鋪者也仍如件

永祿 戊辰

十二月廿八日

家康

久野千菊殿

此月

皇子誕仁親王

陽光院

元服加冠清長

二条 理髮經元

朝臣

老人雜話

靈陽院殿を光源院殿中より南都一宗院法門跡小す

まじり永祿八年小二好り光源院殿と報せしより一宗院殿なる

多ひて方々大名と頼りしは是も此の世に改年小好り信長

をいひしに信長曰む安き事なり大下と承て文つんとて同道

してより、二好の黨と討て、靈陽院殿と天下始りて定め、本
寺におわく徳ありありとて、かくまへ、後、早小治り、信長、本國寺
小治り、一日、小治津、池田、伊丹、保り、小者、本礼とて、ゆ伏せ
信長、後、早小治り、後、二好、本國寺、尼、後、池田、小治り、者、も
又、後、より、本國寺と、攻む、是と、本國寺、合戦、し、り、水、深、十、年
北、治り、本國寺、院、小、亦、部、と、攻む、れて、殺、一、重、小、治り、者、也、小
初、信、長、一、後、一、り、池、田、伊、丹、亦、亦、り、二、好、の、黨、と、討、て、一、て、逐
小、島、山、治り、り、り、信、長、も、是、と、ゆ、て、早、速、と、せ、り、あり、り、れ、も
既、小、礼、禪、と、後、之、取、本、國、寺、と、小、も、公、許、り、り、り、て、室、可、本、治、陣、也

城と築く、島山とて、今、本、武、治、陳、東、側、に、垣、あり、西、側、に
町、あり、家、中、本、武、士、と、向、く、小、屋、敷、と、稱、へ、り、の、事、治、り、り、り、
本國寺、此、岩、坊、と、治、り、り、取、り、家、と、せ、り、信、長、の、島、山、小、治、り、者、也、



武徳成業卷之五終

光緒二十五年

八月廿一日

Vertical columns of handwritten text in cursive script, likely a letter or official document. The text is written in dark ink on aged paper.

Red square seal impression, likely a personal or official seal, located in the center of the page.

